

ールに影響したのはむしろこういう人々である。

リミニのグレゴリウスの命題集註釈は *De Causa Dei* よりも後に書かれたが、このことはグレゴリウスがブラッドウォーディンに依拠していたことの証明にはならない。ブラッドウォーディンの著作を知る前に、命題集註釈の大筋が完成していたことは十分考えられることである。というのは1340年にグレゴリウスがパリで *sententiarius* になる以前に、イタリアの大学で12年間講議しているからである。意見が同じであるということは必ずしも影響を受けたということを意味しない。従ってオクスフォードとイタリアで別箇にアウグスティヌスへの復帰が活潑に行われたと仮定すべきである。グレゴリウスのルターへの影響ということが暫定的な主張にすぎないばかりか、グレゴリウスのアウグスティヌス復帰がブラッドウォーディンとは独立に行われたのであるから、ルターと *reformation* がブラッドウォーディンに影響されたという見解は放棄されるべきである。ブラッドウォーディンの学説から云っても、その影響から見ても、彼を *pre-reformer* とすることはできないというのが著者の結論である。

本書は、ブラッドウォーディン神学の単なる概説ではなく、スコトゥス、オッカムは勿論のこと同時代の種々の思潮との関係が常に考慮されているところに特色がある。著者は相互の影響、依存関係等を明らかにすることも忘れていない。著者の議論に賛同するかしないかは別問題として、この点で本書は、著しく遅れている十四世紀思想史の研究に一つの貢献をしたと云えよう。

Francis J. Kovach

Die Aesthetik des Thomas von Aquin.

S. 279. Walter de Gruyter. Berlin. 1961.

柏木英彦

本書は P. Wilpert 監修の叢書 *Quellen und Studien zur Geschichte der Philosophie* の第三巻である。

十九世紀以来トマス的美論を扱った論文はかなりの数にのぼるが、著作年代に従った研究 *genetisch* な分析はまだなされていないし、体系的叙述にしても部分

的にしか行われていない。本書はこの欠陥を補おうとする。まず序文では新スコラ学派の美学における欠陥が指摘される。たとえばトマス的美論について論じられる際、引用される箇所がごく僅かであるし、またそれが二次的意味しか持たない箇所であることが多い。いまだに *In Dion. div. nom.* に見られる豊富な資料が利用されていない。例の *L. Callahan* の著書もその例外ではない。その他まだ分析されていない箇所は無数にある。また美の超越的性格について見られるごとく、トマスの著作の同じ箇所から全く異なる結論が引き出されている。要するにトマス的美論をめぐる意見の対立、論争はトマスについての知識の不足、理解の不十分なことに原因がある。トマス的美論は今日でもまだ十分知られていないし理解されてもいない。著者はこの空白を埋めようと試みているが、特に *In Dion. div. nom.* を重要視する。

本論は *genetisch* な分析と *systematisch* な分析との二部より成るが、*genetisch* な分析では、トマスの著作年代に応じて、いかなるテーマがどの程度出てくるか、トマスの関心にはどのような変化が見られるかというようなことが分析される。トマスは美について終始一定の見解を維持しているが、美の本質的要素、美の超越的性格に関しては年代的に云って見方の上で変化がある。

本書の三分の二は体系的分析に当てられ、美の实在性、美の本質、美と秩序、美の超越的性格、美の類比、美的体験等の問題が論究されるが、ここで二、三論点を紹介したい。

美の本質に関して、著者は *S. Th. I. q. 39. a.8* に従って *integritas, proportio, claritas* の三つの要素を分析する。*integritas* は *perfectio* と実際には同じことを意味するが、ただ *integritas* が消極的にあらわすことを *perfectio* は積極的に表現する点で相異がある。*proportio* の相関概念としては *consonantia, harmonia, conformitas, convenientia* を挙げて説明している。*claritas* の原理は形相であり、初期には *splendor* という用語が使用されている。トマスは美の本質構成要素として以上の三つを挙げる一方、美は秩序 (*ordo*) と同一であるとしている。ところで美の三要素は相互にどのような関係にあるのか、なぜ *integritas* が第一の原理で *proportio, claritas* の順になるのか。この問題は美と秩序との関係において明らかにされる。秩序は美と同様に三つの要素を含む。すなわち *distinctio partium, convenientia partium, ratio prioris et posterioris* である。そしてこの三つがそれぞれ秩序の *causa materialis remota, causa materialis proxima, causa formalis* に当る。秩序と美との関係では、秩序の三要素が美の三要素に対応する。この相

応関係について生じ得る疑点を著者は三つ挙げているが、その一つはトマスでは秩序は善の性格を持ち、目的因の領域に属すが、美には形相因が帰せられるから、両者の本質的構成要素は相応しないのではないかという疑問である。これに対して著者は次のように答える。秩序は形相因の性格も持っている。秩序は部分に関しては目的因の性格を持っているので善であるが、認識主観に関しては形相因の性格を持っているので美である。さて美の三要素相互の関係は秩序の三要素との相応関係から答えられる。両者の三要素が相応するのであるから、*integritas* は美の *causa materialis remota* に、*proportio* は *causa materialis proxima* に、*claritas* は *causa formalis* に当ることになる。ところが生成の順序から見ると、*causa materialis remota* が一番先で、*causa formalis* は最後に来るので、美の三要素は *Integritas, proportio, claritas* の順になる。

美を超越的一般者 (*transcendentalia*) に数えるかどうかということに関して、否定的な意見を持つ学者もいるが (J. Donat, J. Urráburu等)、著者は美を *relativ* な超越的一般者と認めている。そうすると真および善との関係はどうか。まず真との関係を見ると、美は真を含む。美の第三の要素たる *claritas* は *intelligibilitas* を意味するから、美は真の性格を持つことになる。超越的一般者の序列から云うと、論理的に真より後である。美が真と結びつくのは第三の要素たる *claritas* によってであるが、*claritas* は美の形相因的性格を持つから、ちょうど合成体が形相に対するごとく、美は真の後にくる。次に善との関係について見ると、*integritas* と *proportio* は善の性格を持っているから、美は善に対して全体という関係にある。従って美は善を含む。序列の上では美は善の後に来る。善はいわば美の質料的原理であり、真は形相的原理である。美は第一に知性に関係することによって *intelligibilis* であり、次に意志に関係することによって *appetibilis* となる。美はこの二つの性格を *ens* に加える。しかし美は単に他の超越的一般者の総括というごときものではない。実在は美を通じて自己の完全性を充足するのである。美は *der krönende Abschluss der Reihe der Transzendentalien* であり、*der glänzende, edelste Juwel der Wirklichkeit* である。

最後に美的体験に関して一つの問題に触れておこう。美的対象の認識を実体的形相や偶性的形相の認識とただちに同一視することに著者は反対する。美の認識においては形相の抽象、美の概念の形成が問題なのではなく、具体的個別的な美の三要素の *das geistig-rationale Erblicken, apprehensio* が問題なのである。そしてこの場合の *apprehensio* は *diskursiv* ではなく *intuitiv* な性質のものである。

トマスの著作にこの解釈を直接保証するような箇所はないので、この辺は異論のあるところであろう。

以上は本書の論旨の一端であるが、著者はトマスの全著作を調べ上げ、美に関係ある箇所をことごとく取り出し、美が存在論的に非常に広範囲に及ぶ包括的な性質のものであることを明らかにしている。ここに本書の意義があろう。著者の意図は、いわばトマス自身をして語らしめることによってトマス自身の説を叙述することである。従ってトマスの美論の解釈、擁護、現代的意義の究明等は今後の課題として残されている。脚註のおびたしい引用箇所の指示のほかに、トマスが美の問題に触れた箇所を著作年代順に整理した巻末の表は、トマスの歴大な著作を読み通すことが容易でないだけに貴重であり、この点でも本書は今後の研究に寄与するところ少なくないであろう。